カヨウ 加陽　金澤の城下を加陽と解することもある。洛陽に倣うたのであらうが、陽字は無意味と言はねばならぬ。

カヨウアシガルユイシヨキ 加陽足輕由緒記　六册。元祿十四年五月九日前田綱紀が、割場の戰許に屬する足輕にして、越前府中以來前田氏に仕へた者、及び慶長五年までの間に召出した者の兩樣につき調査を命じた際、之に該當する者の由緒書を徵して取集めた記錄である。

カヨウシキ 加陽史記　一册。萬治二年から寛文五年に至るまでの加賀藩の記事を載せたものである。

カヨウジセキジツロク 加陽事跡實錄　一册。金澤市中の種々の故跡・事蹟を記したものである。序跋はないが、亡父堀藤九郎行思の譜があるから、著者は行思の子であらう。

カヨウシヨシゲンコウヒツキ 加陽諸士言行錄記　編者及び著作年代不詳。多く藩士の逸話を錄したものである。

カヨウソナヘサダメ 加陽備定　一册。有澤永貞著。寶曆四年霜月草し、五年孟夏改書、六年夏之を前田綱紀の內覽に供した。大坂兩陣に於ける加賀藩兵の配備その他に就いて記したもの。

カヨウタイヘイキ 加陽太平記　二册。安永九年二月八日加賀藩士高田善藏が、金谷殿中に於いて中村萬右衞門を殺害した事實を小說化して記したもの。序文によれば、金城思義傳といふ書を見て補修したものであるといひ、天明元年五月浪華文淸堂と署してあるが、藩人の著であらう。

カヨウチユウコウジツロクノユメ 加陽忠實錄夢　↓タカタゼンゾウデン　高田善藏傳。

カヨウトラノマキ 加陽虎之卷　一册。前田利家以降綱紀に至るまでの談話を記する。享保年間の筆記で、御夜話の類である。

カヨウネンダイヨウラン 加陽年代要覽　一册。奥村榮實著。和漢年契に倣うて、天文元年から文化八年までの加賀藩に於ける重大事件を略載し、藩侯座右の便覽に供するが爲呈したもの。

カヨウネンブ 加陽年譜　六册。馬淵高定著。菅家見聞集の冗文を省き、聊か私考を加へたもの。その第六册は、貞享二年から正德二年までの追加で、高定の子馬淵伸暢の編である。

カヨウフチユウサイケンズフ 加陽府中細見圖譜　一册。享保十九年有澤武貞著。金澤城の起源、城下の沿革等が記されてゐる。

カヨウフドキ 加陽風土記　一册。天文・弘治から大坂落城後に至る前田氏三代の事蹟を記したもの。末に『此書寛延四年雖一卷述作一甚無詞也。依至同年季秋一令悉改正增補一者也。嘯月堂』とある。

カヨウリヨウブンシダイ 加陽領分次第　一卷。有澤武貞撰。加賀藩の領土の變遷に關して記したものである。

カヨセハチマンシヤ 蟹寄八幡社　羽咋郡龍谷妙成寺の境內に在つて當寺の鎭守である。開山日乘上人が寺中の蟹をこゝの拜殿に封じたといふので、蟹寄八幡と稱する。

カヨヒメカケ 通姜　寶曆の頃彝倫の弛緩したことを述べた文に、『妻ある者にして姜を置き、姜を姜として足れりとせず。又別に媚を獻じ床を同じくする姝麗者ありて、各館の諸閨閤に周旋し、俗に之を通姜といふ。』とある。これは移動制の娼婦と見ていゝ。

カラカサ 唐笠　珠洲郡正院鄕に屬する部落。

カラカハ 唐川（カラコウ）　鳳至郡穴水鄕之內大屋庄に屬する部落。天文元年七月の諸橋六鄕南北棟數注文に、『五十八間(軒)からかう』と記される。藩政時代から上唐川・下唐川二村に分かれた。

カラサキ 唐崎　鹿島郡小島の海岸で、津向に近い所をいふ。

カラサキシヤ 唐崎社　鹿島郡小島に鎭座し、神功皇后を祭神とする。もと四月中ノ申日に府中山王祭の御旅所とした。

カラサキノマツ 唐崎松　金澤兼六園內霞ヶ池の畔に植ゑられてゐる。前田齊泰が、近江八景の一つに數へられる唐崎の松の松毬から實生にしたものだと傳へる。

カラシマ 唐島　鹿島郡鹽津の東端に在つて、周廻一粁六、樹木蔚蒼、上に唐島社がある。もと離れ島であつたが、享保の頃の埋立によつて地續きになつた。能登名跡志に、『沖に辛島といふて神森あり。此島風景勝れり。』と記する。

カラスガハ 烏川　珠洲郡に在る。水源大谷領山から出で、馬緤領で海に入る。流程四粁許。

カラスジマ 烏島　鹿島郡能登島なる佐波の東方海上の島。

カラステノゴキ 殼捨の御器　鳳至郡前波附近の河川又は海邊より燈明盞の如き土器があらはれる。徑五糎乃至七糎、厚さ二粁。地方人之をからすてのごきといひ、金澤にては能登平盞といふ。越登賀三州志に、『能州諸橋邊よりは、神代の遺物天のひらかとて、素燒にて茶碗の形のやうなるものを今に掘出す。之に大小あり。』と記する。

ガラデ がら出　珠洲郡宗末の內の小字。

カラトイシ 唐戸石　石川郡末松の大見八幡神社境內に在る。縱橫二米餘、上に孔を穿つてある。神社の附近西方の寺址から發掘したもので、塔の柱礎である。

カラトヤマノスマフ 唐戸山の角力　唐戸山は羽咋郡羽咋南方の砂丘で、その間にある盆地の最低部を土俵場とし、周圍の斜面は自然の桟敷に利用せられる。こゝの年中行事である角力の力士は、上山加賀・越中、下山能登・佐渡に分かれる。行司が一たび團扇を引くと鬨じて猶豫を許さないため、『羽咋の相撲で待つたなし』の諺がある。最後に相角して二番連勝したものが大關とせられ、翌日未明羽咋神社に參拜して賞狀と幣を受ける。毎年九月二十五日(陰曆の頃は八月)に行はれ、その前後三日間本念寺に報恩講があり、同時に大市が開かれる。

ガランシユウ 賀蘭州　加賀國を唐めかしていふ稱。諸名家の文集に多く見える。

カリ 可理　↓オホハシカリ　大橋可理。

カリ 苅　戰國以前田地の大きさを示すに何束苅又は何苅といふことがある。一町を千苅とするのであるから、何町何百何十何苅などとも算する。

カリガネ 雁金　越登賀三州志に、享祿四年能越の兵が加賀に入り、指江・雁金・黑津舟・宮腰に繼進したといふことがあり、村誌を案